



TITLE:

The Tradition of the Vice and Shakespeare's Villains in His Tragedies(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Tone, Yuuki

CITATION:

Tone, Yuuki. The Tradition of the Vice and Shakespeare's Villains in His Tragedies. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19078>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

| | | | |
|---|---|----|-------|
| 京都大学 | 博士（人間・環境学） | 氏名 | 利根 有紀 |
| 論文題目 | The Tradition of the Vice and Shakespeare's Villains in His Tragedies (ヴァイスの伝統とシェイクスピア悲劇の悪党たち) | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>イギリス中世道徳劇には、人間の悪徳を表現する寓意キャラクター「ヴァイス」(Vice)が登場するが、時を経た初期近代のシェイクスピア劇にもヴァイスの性質を引き継いだ悪党が登場する。バーナード・スピヴァック (Bernard Spivack) の著書『シェイクスピアと悪の寓意』(<i>Shakespeare and the Allegory of Evil</i>) はこのことについて本格的に論じた先行研究であり、特に、シェイクスピアの悪党がヴァイスの性質と、ヴァイスにはない心理や人間性とを兼ね備えたハイブリッドな悪党 (hybrid villain) であることを示した。だがスピヴァックの研究はキャラクターのヴァイス的行動を指摘することを中心としており、そういった行動と劇全体との関わりについては論じきれていない。そこで本論文ではヴァイス的性質を持った悪党が活躍するシェイクスピアの悲劇、すなわち『タイタス・アンドロニカス』(<i>Titus Andronicus</i>)、『リチャード 3 世』(<i>Richard III</i>)、『オセロー』(<i>Othello</i>)、『リア王』(<i>King Lear</i>) 一つ一つに注目し、それぞれの悪党、エアロン、リチャード、イアーゴ、エドマンドのハイブリッド性 (hybridity) と悲劇全体の構成やプロット展開とがいかに関接に連動しているのかを明らかにする。</p> <p>『タイタス・アンドロニカス』には、タモーラが息子を生贄にした主人公タイタスに復讐し、その後タイタスがタモーラに復讐し返すという復讐の循環構造があるが、第 1 章はエアロンのハイブリッド性がこの構造の表象に深く関連していることを分析している。つまり『タイタス・アンドロニカス』のような残酷劇の主人公はともすると単に残酷な復讐者になってしまいがちだが、この危険を避けるためにシェイクスピアは、復讐の動機を持つタモーラではなく、無動機でヴァイス的なエアロンを前半のタイタスへの復讐の首謀者にした。しかも無動機にも関わらず “vengeance”、“revenge” といった言葉を含む台詞を話すことで、エアロンの行為はタモーラの復讐を肩代わりした復讐行為であるかのように観客に錯覚させる。その結果、理不尽な苦難に苦しむタイタスの姿を悲劇の主人公として観客に印象付け、その後のタイタスの残酷な復讐行為を正当化し得た。一方、劇後半では、シェイクスピアは、エアロンとタモーラの間に生まれた赤子を登場させ、我が子の殺害を命じるタモーラとは対照的に、愛情というヴァイスには見られない感情をエアロンに付与し、それによって二人の繋がりを断ち切った。その上でこれまで抑えられていた復讐者としてのタモーラの姿を前面に押し出し、タイタスの復讐の対象を彼に対する悪事の首謀者エアロンではなくタモーラに絞っている。その結果、タモーラがタイタスに復讐し、そのタモーラにタイタスが復讐し返すという復讐の循環が成立したのである。このようにハイブリッドな悪党としてのエアロンの造形は、悲劇の枠組みの中で復讐の循環を描く作品の趣向と密接に結びついている。</p> <p>『リチャード 3 世』の冒頭において主人公リチャードは、ヴァイスのような悪党を演じてみせると宣言する。第 2 章では、リチャードのキャラクター造形はチューダー朝の</p> | | | |

歴史観に沿っているように見えるが、このような台詞によって独自のリチャード像が創り出されていること、そして、リチャードは二つの意味でハイブリッドな悪党であることを指摘している。シェイクスピアはリチャードを描くに当たり、実在した王をモデルにしながら、チューダー朝の歴史家が作り上げてきたリチャードのイメージに合わせてヴァイス的な言動をさせており、歴史上の王と道德劇の伝統的な役柄が合わさっている点でまずリチャードはハイブリッドな悪党だと言える。だがリチャードのもう一つのハイブリッド性は、本来の人格とは別にヴァイス的な悪党を演じるという彼の認識に見出せる。彼が演じる人格は悪を体現する寓意的な性質を持つが、劇後半で、役柄として演じてきたはずのヴァイス的な性質が本来の人格と溶け合う時、ハイブリッドな悪党ゆえの独自の悲劇性が生まれることになる。

第3章は『オセロー』においてイアーゴーが行う悪事の動機に注目し、特に先行研究を整理、分析することで、劇構造やテーマとヴァイス性との関わりについて指摘している。演劇の伝統という観点からイアーゴーを論じる批評家の多くは、動機の曖昧さの理由をヴァイスとしての性質に見てきた。だが、イアーゴー自身が独白で言及する嫉妬を動機と見なし、嫉妬を暗示する台詞や場面造形を分析すると、周りの状況に影響されずに冷静に他人を操るイアーゴーの姿はヴァイスの型を彷彿とさせる一方で、同時にその背後には抑えきれない嫉妬という、ヴァイスには見られない激しい感情も明らかになる。イアーゴーのハイブリッド性の特徴は徹底した冷静さと激しい嫉妬という両極端な感情の共存に見ることができる。

『リア王』における悪党エドモンドは、庶子という立場に不満を抱き、嫡子であるエドガーと父グロスターを陥れる。第4章は、このような動機付けがヴァイスの枠を超えた人間的な造形に繋がっている一方で、この作品の劇構造が道德劇の構造と似通っていることに着目する。グロスター父子の関係とリア父娘の関係は、「人間」を挟んで対立する「悪徳」と「美德」という道德劇的なモチーフの上に描かれている。庶子という出自に対するエドモンドの不満はヴァイスには見られない心理だが、道德劇と『リア王』との劇構造の類似性という観点から考えると、エドモンドの行動の背後には父グロスターの「姦淫」という罪が寓意的に含まれていることがわかる。すなわちエドモンドというハイブリッドな悪党には、非ヴァイス的に見える側面にもヴァイス的あるいは道德劇的な寓意性が付与されており、極めて重層的な人物造形となっているのである。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

シェイクスピア(William Shakespeare)の四つの悲劇『タイタス・アンドロニカス』(*Titus Andronicus*)、『リチャード3世』(*Richard III*)、『オセロー』(*Othello*)、『リア王』(*King Lear*)においては、主要人物を悲劇的展開へと陥れる悪の人物が活躍する。本論文は、そうした登場人物たちが、中世道徳劇に登場する寓意的キャラクターであるヴァイス(Vice)(悪徳)の伝統を引き継ぎながらも、どのように逸脱しているのか、また、それが悲劇全体の構築とどのように関わっているのかを検討し、そのことでシェイクスピアの劇作術の一端を明らかにする。

シェイクスピアの悪党たちにヴァイスの影響があることは既にバーナード・スピヴァック(Bernard Spivack)が記念碑的著書『シェイクスピアと悪の寓意』(*Shakespeare and the Allegory of Evil*)において指摘している。スピヴァックはタイプとしてのヴァイス的性質と、心理や人間性とを兼ね備えているキャラクターをハイブリッドな悪党(hybrid villain)と呼んだ。だがスピヴァックの議論の主眼はエリザベス朝演劇に流れるヴァイスの伝統の例を指摘していくことにあり、劇全体の展開との関わりは論じ切れていない。また本論文が4章で扱った『リア王』に関する分析は一頁にも満たない。スピヴァック以降ではロベルト・ヴァイマン(Robert Weimann)やアラン・デッセン(Alan C. Dessen)が、前者は主にヴァイスの表象について、後者は後期道徳劇とシェイクスピア、特にその歴史劇や喜劇との関係を検討してきたが、本論文のように、スピヴァックの重要な論点をもう一度取りあげ、悲劇の展開の中で悪党たちのヴァイス性と非ヴァイス性とのハイブリッド性(hybridity)が具体的にはどのように機能しているかに踏み込んだ議論は極めて少なかった。まずこのことに本論文の意義を見ることができる。

つまり本論文は四つの悲劇における悪党について検討するものの、単純なキャラクター論に終始せず、悲劇の劇構造にまで立ち入った議論を展開している。評価に値する具体的な点を挙げると、『タイタス・アンドロニカス』論においては、タイタスとタモーラとの機械的な復讐の循環構造のために、エアロンのヴァイス性と息子への愛情という非ヴァイス性が劇の前半と後半とで使い分けられていることについて、説得力のある議論を展開したこと、『リチャード3世』論においては、シェイクスピアがヴァイスの伝統を使ってチューダー朝の歴史観に沿ったリチャード3世像を表出する一方で、最終局面では役者とキャラクターとの非同一性というテーマを利用することによって、ヴァイスという演劇的要素を悲劇性に繋げたことを解明したこと、『オセロー』論においては、悪党イアーゴの人物造形には冷酷なまでの落ち着きと激しい嫉妬という極端な二要素が共存しており、ヴァイスの伝統の導入はこのことに寄与していることを鋭く指摘したことが挙げられる。さらにイアーゴが他の登場人物の

感情を映し出す鏡としても機能しているという論点も評価できる。また、『リア王』においてヴァイスを彷彿とさせるエドモンドには、自分の出自への不満という、ヴァイスとは相いれない性質があるが、この非ヴァイス的な設定には、例えば父グロスタ

一の姦淫といった他のキャラクターの罪も寓意的に暗示されており、道徳劇の遺産が劇の中に複雑に組み込まれているという指摘は極めて示唆に富んでいる。このように本論文は、シェイクスピアがじつに多様な手法でヴァイスという伝統を発展させ、それぞれの悲劇の展開や性質に合わせたキャラクター造形をしていることを明らかにしている。

今後の研究の課題としては、劇の中に現われる寓意性の宗教的含意、ヴァイスと悪魔との関係性、当時の寓意画との関連などについて、さらに深い議論を展開することが挙げられる。

全体的に先行研究への言及や引用は多く、特に『オセロー』の章は充実している。だが、スピヴァックやデッセン、ヴァイマンといった中心的な先行研究の主要論点を議論の中で十全には紹介し得ていない。先行研究の指摘してきたヴァイスの喜劇性や道化性についての検討があると、より充実した議論が展開できた可能性もある。ただしこれは、作品の悲劇性を扱うという本論文の性質と関係しているだけでなく、公聴会で審査員によって指摘されたように、議論の独自性を強調しようとした結果としても理解することができる。

本論文はシェイクスピアによるヴァイスの利用というスピヴァックの議論をもう一度取りあげて新たな考察を加えたこと、そして、ヴァイスという視点から作品全体の仕組みにアプローチし、それぞれの作品の新たな側面に光を当てたことは十分に評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降